

官立宇部高等工業学校の創立

官立高等工業学校の誘致

昭和の初頭、国内には工業に関する高等技術者を養成する専門教育機関として、旧制中等学校から直接入学できる官立の高等工業学校、あるいは専門学校が全国に18校存在していた。昭和13(1938)年、戦局が拡大する中、技術者の拡充を図るため、文部省は新たに7つの官立高等工業学校を増設することとした。国内での地理的な配分を考慮した結果、山口県に新設するよう立案された。

当初は、政治的・教育的環境の観点から、山口市が候補地とされたが、山口市は文部省の要求する土地や資金を提供し得る財政的余裕を持たなかったため、結局断念した。そこで当時、新進工業都市として発展の段階にあった宇部市が、鉱工業に必要な人材の確保という点からも工業に関する高等教育機関の設置を希望し、高工誘致に名乗りを上げた。

建設用地には、宇部市が一望できる広々とした高台(現在の常盤台)が候補として選ばれ、市の交渉の結果、約4万坪にも及ぶ広大な土地が確保された。宇部市からの寄附(土地のほか、学生寮、教官官舎の建築費及び現金40万円)や地元企業からの寄附(現金75万円)の申し出を受けた県は、さらに現金40万円を添えて政府に高工設置を願い出た。

これにより昭和14年、修業年限3年の官立宇部高等工業学校(以下「宇部高工」という)が誕生した。同時に室蘭、盛岡、多賀、大阪、新居浜、久留米にも官立の高等工業学校が開校した。



昭和13年頃の宇部市

学生募集と入学式

昭和14年(1939)5月23日には生徒募集要項が告示された。募集人員は機械科、精密機械科、工作機械科、鉱山機械科、採鉱科の5学科各40名で合計200名、入学試験は6月に宇部と東京で行われた。

学生は広く全国から集まり、7月11日、第1回入学式が仮校舎の鵜之島小学校の講堂で挙行された。

入学試験日が通常の入試時期より遅くに設定されたことで、旧制高校の入試に失敗した者が多数入学したこともあり、他の既設の高工に比べ、旧制高校に近い自由闊達な雰囲気があった。



鵜之島の仮校舎

初代校長 福井私城と教師陣

文部省は宇部高工設置準備の世話校として東京工業大学を選んだ。その責任者が東京工大予備部主事で理学博士の福井私城であった。

福井校長は当時の宇部では唯一の勅任官(明治憲法下で勅旨により任命される高級官吏)で、官位は県知事より上であったが、宇部の人々は官立高工の校長を旧制中学校の校長くらいにしかなかった。そのため、宴会の席で福井校長が一番上座に座ったことに、皆大変驚いたとのエピソードがある。

宇部高工発足当時は、機械、鉱山、基礎の三部制がしかれており、笠松儀三郎、樋口誠一、松山英太郎がそれぞれの部長に就任した。基礎部を独立した部として位置づけたのは、高工教育に数学、物理、化学などの基礎科目のみならず、人間形成に必要な人文系学科をも重視した福井校長の英断であった。

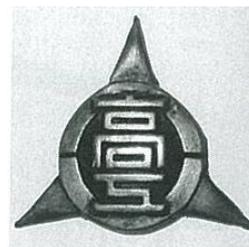


福井私城

校章と教育目的

宇部高工の校章の図案は学生たちから募集された。

福井校長は、この校章の形から宇部高工の教育目的を「真・善・美」であるとまとめた。



新校舎の完成—鵜之島から常盤台へ

昭和14(1939)年11月、宇部高工の校舎、官舎、寮の第一期工事が起工された。工事費は21万2千円であった。翌年4月、新校舎が常盤台(「常盤台」という呼び方は初代校長による)に完成し、新学期の授業は新築の校舎で行われることとなった。運動場の整地は、すべて学生による奉仕作業で行われた。



常盤台新校舎への移転

学生は自分たちの机に竹棒を差し、2人1組で肩に担いで鵜之島より常盤台まで歩いて運んだ。

その後も建設は急ピッチで進められ、17年春には、本館や講義室、実習工場、実験棟などが完成し、校門などの付帯工事を残すのみとなった。工業に関わる人材の育成が国の急務とされたこともあり、人材や資材が不足がちであったにもかかわらず、異例の建設スピードであった。

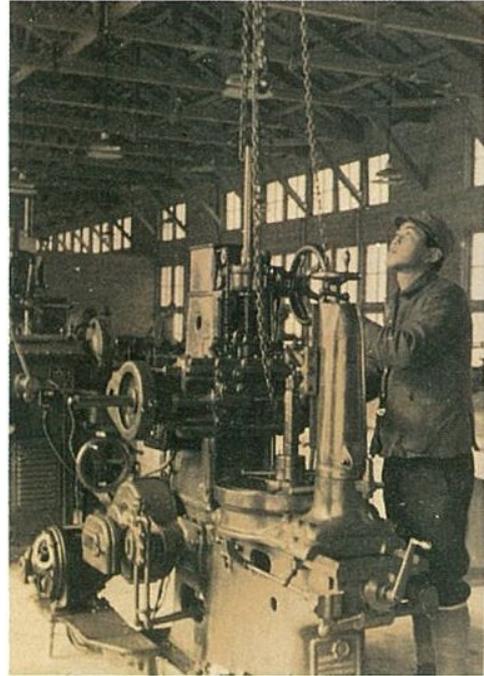


完成した新校舎

開校当時の教育

宇部高工の発足した昭和14(1939)年には大学、高校、専門学校の修業年限の短縮が決定され、宇部高工の第1期生、2期生も繰り上げ卒業となった。昭和17年には工業化学科(定員40名)が新設され、その後毎年、機械系・鉱山機械、採鉱学科は大幅な増員を続けた。機械系技術者の増強やエネルギー政策への重点化など、時代の要請が教育にも大きな影響を与えていた。

履修科目には全科共通のものと各科の専門のものがあり、授業はクラス単位で行われた。全科共通の科目の中には、3学年全てに課せられる「修身および国民科」など当時の世情を強く反映したのものもあった。また、機械科や採鉱科では、外国語として中国語の履修が課せられていた。

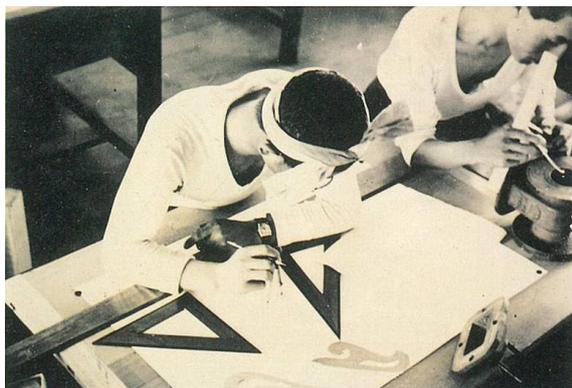


実習の様子(昭和17年頃)

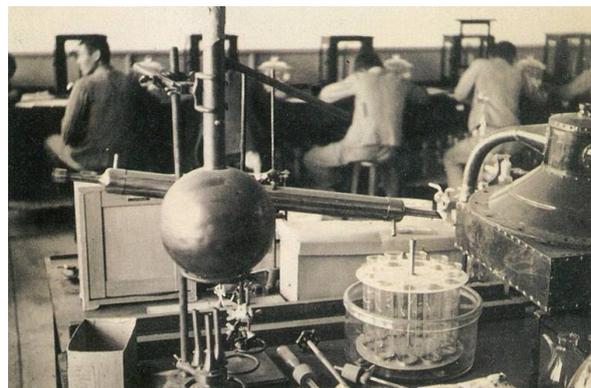


講義風景(昭和16年頃)

昭和16年12月、第1期生163名が常盤台を巣立った。昭和19年には、工業教員養成所(機械科)を附設、宇部工業専門学校へと改称した。1期生から3期生までは2年半の修業年限ながら、ほぼ時間通りに授業がなされたが、秋以降は、3年生、2年生は工場や鉱山へ勤労働員として駆り出されたため、現地での出張授業も行われた。



製図実習(昭和17年頃)



化学天秤測定(昭和17年頃)